

<特集論文>震災後の平林初之輔：『文芸戦線』離脱のころまで

大和田，茂 / オオワダ，シゲル

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

34

(終了ページ / End Page)

43

(発行年 / Year)

1994-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019723>

震災後の平林初之輔

——『文芸戦線』離脱のころまで

1

初期プロレタリア文学を先導した理論家といえ、平林初之輔と青野季吉の名をあげるのが今日の揺るがない定説であろう。この二人は、若き日に国際通信社という外資系の会社に勤めながら互いにマルクス主義を学びあった僚友であり、『種時く人』の同人として盟友関係にもあった。そして、一九二三年九月の関東大震災によって廃刊やむなきに至った同誌を引き継ぐ形でされた『文芸戦線』にともに同人となったが、青野は終始その中心的存在であったのに対して、平林の同誌への寄稿はわずかであった。彼は一九二七年七月に正式に脱退し公然と『文芸戦線』派を批判しているように、つまり震災後のこの二人はやがて進む道を別にして論争まで交わり、同志として再び手を結ぶことなく、平林は、三一年六月一五日、わずか三八才でこの世を去っている。

青野はその死に衝撃を受けながらも、すぐに平林への友情と敬意

大和田 茂

を込めた追悼文に当たる「平林初之輔論」（『新潮』同年八月）を書く。この平林論は、これまで私もいくつかの論文（拙著『社会文学・一九二〇年前後』所収）で指摘したようにさまざま問題をはらんだものであるが、やはりかつての盟友らしく単なる追悼文の域を超えて平林の主要な仕事をきちんとカバーし位置付けており、戦後の平野謙「平林初之輔のこと」（『政治と文学の間』所収・一九五六年一月未來社刊）などとともに、平林研究者がつねに立ち返らなければならぬ重要文献であろう。

そこで今回も、同時代を生きた青野のこの論文から、『文芸戦線』離脱前後までの平林像を考察し始めたいが、この時期をめぐる平林への青野の見方もやはり大いに問題がある。この論文の前半で「社会運動家ないしは社会思想家」としての平林初之輔の活動同時期を一九二二年四月創刊の『無産階級』（平林・青野・市川正一らが出していた社会評論雑誌）の時代から「震災後の『政治研究会』の時期」という短い期間に置いて、それを三期に分けている。この区分けについては、拙稿「社会運動家としての平林初之輔」（前掲書所

収)に詳しく異論を述べておいたので、繰り返さない。このたび問題にしたいのは、第三期に当たる震災後の「政治研究会」離脱にかかわる青野の平林への見方である。

「政治研究会」とは、震災後間もなく山本権兵衛内閣によって打ち出された普通選挙断行の方針を受け、穩健的社会主義者らが無産階級政党準備のため多くの知識人や労働組合に呼びかけ結成された団体で、平林と青野も創立委員の一人である。平林は当時青野に「あの運動は大切だから」と繰り返し言っていたように、一九二四年から二五年前半までは、文芸評論よりも政治社会評論に力を入れ、その著作の方が多いという点からも、日本における自由主義、ひいてはブルジョア・デモクラシーの達成がまず第一に大切だと平林自身は真剣に考えていたようである。

政治研究会では、さまざまな政治綱領案を各グループから提出させているが、二四年一二月平林は大山郁夫と合同で、「憲法の許す範囲に於て」という制限付きながら一応のブルジョア・デモクラシーを目指す私案を提出するが、翌年春の大会を前に否決され、結局は、解党したはずの共産党ビューローから送り込まれた急進的左派グループ(青野も一時ここにいた)の案が、「東京評議会案」として可決され、「無産政党準備委員会本部」へ送られた。手っ取り早くいえば、このとき平林は政治研究会に見切りをつけ、広範な大衆政党史現の夢を見るのをやめたのであり、依然プロレタリア文学運動の拠点『文芸戦線』の同人ではあったが、「運動」から遠ざかったと青野にいわれる時期がやって来る。すなわち、一九二五年の春から夏にかけてである。

平林が「運動」から離脱した理由として、青野は四つの理由を上

げているが、いずれもが真相から少しずれているようだ。(吉田精一は、これらの理由が「当たってはいよう」といつているが——『近代文芸評論史』一九八〇年一二月至文堂刊)第一の理由としては、震災後の反動期におけるインテリの退却傾向のひとつというが、平林が「退却」したのは正確には反動期ではなくもっと遅い。仮に百歩譲って「反動期」を一九二五年末あたりまでと考えても、青野は、震災直後における平林の『種蒔く人』再建会議での発言を少しも理解していない。これは『人民文庫』一九三六年一〇月号での座談会「社会主義文学の抬頭期を語る」(三号に亘る連載の完結篇)で、その会議の席上平林が自分たちの運動は間違っていた、もう一度自由主義からやり直さなければならぬという旨の発言をしたことが出席者(金子洋文・佐々木孝丸・青野ら)の証言から明らかにされている。また彼自身も「当面の諸問題に対する私見」(『建設者』一九二三年一二月)において、震災後の政治的反動の中でいかに日本の無産階級の運動が観念的で無力であったかを述べ、これからは当分社会主義的主張は引っ込め大衆の要求に密着した自由主義的目標を設定して、プチ・ブル勢力との協力をも視野に入れた普選実現と大衆への啓蒙活動が当面の課題だといっている。

震災後の平林のプロレタリア文学運動及び社会運動へのかかわり方にはこの考えが根底にあり、ここからすべてが理解できるといってもよい。青野が「運動」離脱理由の第二としてあげている運動における自己の活動力に疑問をもったという点は、政治研究会に見られるようなデモクラットとも容易に手を結びそうにない急進左派の抬頭という流れに、なすすべもない己の無力を嘆いたのであり、有島武郎の「宣言一つ」へ理解を示したのもその時の弱音のようなもの

だろう。青野があげる第三の理由、運動の行方に不透明観を持っていたことも、以上のことから説明がつく。また、「運動」をプロレタリア文学運動の意味にまで広げるなら、平林は『文芸戦線』同人としては、つかず離れず傍流を歩んでいたのであり、これも彼が『種蒔く人』再建会議で自己批判したように、文学運動も急進主義を清算しなければならなかったのに、十分な総括もなく、『文芸戦線』は広範で大衆的な文芸雑誌になろうとするどころか、『種蒔く人』よりも所帯の小さな同人誌として出発し、しかもマルクス主義的思想ひとつにまともなまっぴりことしていた。

この点は、祖父江昭二の「つまり、運動の後退を通して、過去の経験が反省され、主体的に運動再建の理論が『共同戦線』理論として構築された結果、『種蒔き社』が『文芸戦線社』へと発展したのではなかったのである。」「反動期ということにとらわれて、視野を局限し、情情的な・パーソナルな結合にもたれかかるところで」「運動を『共同戦線』的におし進めていくことが積極的には意識されないでしまったのである」（『プロレタリア文学』―『岩波講座・日本文学史』第一三巻、一九五九年二月刊）という鋭い指摘があるように、平林ならずとも誰しも文学運動の行方にはつきりとしたヴィジョンを描けないでいたし、特に平林は、旧『種蒔く人』同様に『文芸戦線』を社会主義者で固めることに懐疑的であったのだろう。平林の同誌への消極的姿勢は震災後の文学運動への暗黙の批判である。

ところで、青野のあげる離脱の第四の理由は健康問題だというが、これはその通りであってまたそうでもないといえ、震災前の平林も、健康がすぐれなかった時期があったし、重体というわけでもなく旺

盛に執筆活動しているわけで、この点は問題外のように思われる。

2

青野の「平林初之輔論」は、平林の死の直後に書かれたにもかかわらず、全体としてはすぐれた洞察も随所にある論ではあったが、根底にはやはり平林の自由主義論、日本におけるブルジョア・デモクラシー確立の問題をいかに平林が重視したかを理解できていないという致命的な欠点があった。平林は社会主義革命など、そう簡単に達成できるものではない、まともな社会主義に至るには二、三世紀の時間を要すると「アナトール・フランスの社会思想」（『社会主義研究』一九二四年八月）で間接的に述べている。震災前も震災後も、「浪漫的極左主義」（猪俣津南雄が使い、平野謙が「初期『文芸戦線』の時代」―前掲書所収―で紹介した言葉）というべき語が適合すると思われる政治的空気の中で、多くの社会主義者やプロレタリア文学者たちは「革命近し」という認識の下に活動していた。このような状況の中であって、震災後の平林はきわめてシビアで覚めた見方をしていたが、以下、その政治的認識とは切り離せないプロレタリア文学運動とのかかわりを見ていきたい。

『文芸戦線』創刊号（一九二四年六月）の冒頭には、青野季吉の「『文芸戦線』以前（『種蒔き社』解散前後）」（カッコ内も青野）という文章が掲げられている。これにはつまり「種蒔き社」解散の事情と『文芸戦線』創刊の経緯が書かれており、青野は「種蒔き社」解散の理由を三つあげて説明している。第一には、同人たちが「漸次に団隊的統制を失つて来」ていたこと、第二には、相次ぐ発禁な

どによる資金難で経済的に「震災後全く行詰まった」こと。第三には、『種蒔き社』の同人中に無産階級解放運動の執るべき道に関して、意見の上で多少の距離を生じたため、今後は行動では一致できなくなり、「共同の戦線を張るならば文芸方面に局限せねばならぬこととなつた」からである。（第三の理由により、同人組織による『文芸戦線』が発刊されたということになる）

第一の理由はつまり同人たちに『種蒔く人』を何よりも主舞台にして動こうという求心性が失われてしまったということを意味し、第二は誰もが首肯する理由である。問題は第三の実際運動に対する意見の相違であるが、そもそもこの解散決定の会議（二四年の暮、代々木の青野宅近くの料理屋で）に出席したのは、小牧近江、中西伊之助、青野季吉、前田河広一郎、松本弘二、金子洋文、そして平林初之輔の七人だけであったことは、創刊号の「文芸戦線社同人及び綱領規約」で明らかにされている。これが先ほど触れた「再建会議」と同じ会合であったはずで、小牧近江の『ある現代史』（一九六五年九月法政大学出版社刊）にも描かれている「世田ヶ谷の西原」の会合（「西原」は世田谷になく「代々木西原」である）というのも、この集まりをさすと思われ（出席者が少数で寒い晩とある）、そしてそれまでの運動に対する強い批判を打ち出して、自由主義からの再出発を平林が主張したのもこの会合であった。

当事者の回想やいくつかの研究論文を読んでいくと、『種蒔く人』の再建・解散をめぐる会議は二三回行われたようにとれるが、実際は一回だったはずである。その会議で平林の発言に中西などが反発したりで、平林のは少数派としての意見だったろうが、震災直後の社会主義者には凍りつくような反動期にあって、彼に反対というよ

りなすべき方向性を見失っていた同人たちには一時的にも説得的で、解散を促す力を持っていたと思われる。

これは祖父江昭二も指摘していることだが、「行動と批判」という看板を掲げ「文芸運動と社会運動」（小牧近江）を両輪としてきた『種蒔く人』に比べれば、プロレタリア文学の雑誌として、「一、我らは無産階級解放運動に於ける芸術上の共同戦線に立つ。一、無産階級解放運動に於ける各個人の思想及び行動は自由である。」というたった二項の綱領だけから出発した『文芸戦線』は、運動において『種蒔く人』より後退した位置に立っており、諸家の指摘するように、創刊から約一年余の誌面（途中一度四か月中絶）はたしかに精彩がない。運動と直結しないプロレタリア文芸誌などは、炭酸の抜けたサイダーのようなもので、同人たちは余り元気がなく、やはり「心情的な・パーソナルな結合にもたれかか」った状況しかなかったと考えられる。

その同人たちの中でも、真っ先に『種蒔く人』解散をぶった平林が、いくら文芸の共同戦線に局限した雑誌で「反動期にはなるべく穏やかに」という発刊趣旨の合意はあったとはいえ、本質的に彼の自由主義からの再出発論にほとんど理解を寄せない同人たちの中では、積極的に同誌に関わろうという意欲をもたないのは当然だろう。彼こそ他のもの以上に、まさに「パーソナルな結合」だけで『文芸戦線』に参加していったといつてよい。

平林が『文芸戦線』に書いたものは、八本で本格的な評論はないといつてよいが、吉田精一がいうように「片々たる雑文、感想の類いを執筆して、お茶をにごしたにすぎない」（前掲書）とも断言できない。アメリカの排日法問題に関して、震災直後の社会主義者ら

への虐殺以来、「愛国心」の名のもとにずっと右翼の暴行を許していた政府、新聞に対し、『愛国心』の呪文からさめ」ることを説いた「愛国心の濫用を戒む」（二四年八月）と、政治という「俗事」が実は「最も心奥幽玄な霊の王国をも支配する」ゆえに芸術家は政治経済を軽蔑してはならないことを述べた「芸術家と政治」（二五年六月）などは、とかく勇ましい作品が多い中で、具体的問題をわかりやすく書こうという平林の姿勢が見られるエッセイで、震災後、大衆に密着した一種の啓蒙主義を意識していたものというべきだろう。

プロ文運動の面からも少なからず発言しているが、「無題録」（同年八月）では、「反動的ブルジョワ雑誌」『文芸春秋』に執筆しているプロ文学者を責めた前田河広一郎の短文に発したトラブルにふれ、『文芸戦線』の編集責任者山田清三郎に対して、平林は次のようにたしなめる。

だが山田氏よ。プロレタリアの共同戦線は、箝口令をしき、自由意志を束縛し、或る特定の雑誌に書く書かぬを調べなければ破れるほど脆弱なものではないのである。そんな戦線なら、とうにこはれてゐる筈であり、またつゞいてゐるなら早速こはした方がよいのである。それよりも「この雑誌に書かねばだめだ」といふやうな態度こそ、却つて「個人的な小さい感情にこだはつて、同志の精神や大義名分までごつちやにする」惧れがあると私は思ふ。

これなどかなり思い切った発言だと思うが、見方によっては瑣末なことを扱いながらも、つねに敵か味方か（「ブルジョア」か「プロ

レタリア」か）を区別せずにはおかない運動家の悪癖についており、当時ブルジョア・デモクラシー確立を第一に考え、広範な共同戦線を組む必要を感じていた平林には、このような視野の狭いプロ文学者の動きが耐え難かつたのである。

3

おそらくこの頃（一九二五年半ば）から、平林と『文芸戦線』同人主要メンバーとの溝は広がっていったのではないか。現に同年九月の同誌「散弾」欄（無署名）には、平林がアナキストであつた村松正俊とともに同人の中で「近頃どうも怪しげな（？）御人」として取り上げられ、「平歩リベラリズム『廻れ右』と見たはひがめか、やぶにらみか」などと揶揄され、さらに一月号の中浜哲「牢獄の反響」でも、先の山田などへの発言に対して皮肉られ「俺の知つていた平林君はこんな協調主義者ぢやなかつたやうだつたが、はては面妖だ」と言われているのである。同人たちは平林の真意を理解できなかった。

同人でありながら『文芸戦線』への寄稿が少なかった平林でも、この頃にはその消極姿勢と他と異質な発言が目立ってきた。そして、ちょうどその頃、つまり一九二五年一月にプロレタリア文学の新たな運動体設立の動きがおこり、諸雑誌・諸派の大同団結である日本プロレタリア文芸連盟が発足する。連盟設立の動きはすでに夏ごろよりあつたようだが、平林は当然「発起人」にも名を連ねていない。しかし、この連盟にやはり消極的ながら参加して、三つの文章に感想を述べるほどの関心の強さはあつた。その中の「文芸連盟

所感」(『解放』一九二六年三月)の全文を引いてみると、

プロレタリア文芸家^(アーツ)連盟は、私は名前だけから想像したところでは、一種のプロフェシヨナル・ユニオンで文芸を職業とする人間をもつて構成されるのだらうと想像してゐた。ところが大会へ行つて見たらそうでなく、プロレタリア文芸の共鳴者の集まりだつた。

がそのいづれにしても、私はこの連盟の前途に対して恐らく最も極端なペシミストであるだらう。何故なら、それが発展しさうな可能性を何一つ発見し得ないからである。私は前からさう信じて発起人になることは世話人の山田君にことはつたのであるが、今でも矢張り同じである。

団体的訓練の全くないばら／＼の人間、全く経済関係の共通性のない人間を団結せしめる唯一の力は思想の共通点である。しかるにこれはこの連盟でも最も軽視されてゐるらしい。金持ちをにくむものは皆社会主義者であるといふやうな仮定のもとに思想の最大公約数を求めたのではあんな立派な政党のやうな「綱領」が何一つ実現される気遣ひはないであらう。極おとなしい、他人の悪口はなるべくつつしむといった程度の社会俱樂部から発足するか、それとも会費のとりたてといふことを会の仕事の殆ど全部にするところから出発するかでなければ、あゝいふ性質の連盟は、名前以外のものはつゞかないと私は思ふ。但しつゞいてくれ、ば結構であることは無論であり、私も消極的ながら一会員としての義務はなるべく怠らない決心である。

結成されたばかりの、しかも自分も入会している連盟にかなり否定的なことを言い放っているが、平林は震災前の『種時く人』の運動や「過激思想取締法案」反対運動などで、よほど組織運動のむずかしさを味わつたのであらう、とにかく思想的一致も団体的規律もみられないとしてこの文学団体の行方には悲観的であつた。

それでも、ここでは言い過ぎがあつたと思ひ直したのであらうか、翌月『文芸戦線』に発表された「プロレタリア文芸家^(アーツ)連盟に就て」ではいくらかトーンダウンさせて、前文をやや修正している。すなわち、第一の懸念は連盟の性質が「職業団体ではなくて思想団体であるといふことから」活動は幹部だけの有名無実の会になつていくのではないかと思つたのだが、連盟は各労働組合にも熱心な支持者がおり、基盤が強くなつていけばそれはそれでよい。第二には、思想の不統一で、文学者は興奮しやすく冷めやすい人物が多く思想も不安定だ。また、さまざまな思想の組合に接近すればするほど、思想的な分裂は避けられないという危惧がある。

要するに平林はそもそも連盟の活動が最初から困難だと考えていたが、どうにかやっていると一応認識した。しかし、基本的には思想的分裂、混乱の要素をはらんで見ているわけである。そしてこの予言はすぐ的的中し、東大生を中心にしたマルクス主義芸術研究会(学外からは山田清三郎、千田是也^(アーツ)が参加)のメンバーが同年四月にプロ連を拡大改組したプロレタリア芸術連盟に参加するのを機に、『文芸戦線』内の分裂や同グループのプロ芸からの脱退、さらに脱退してつゞいた労農芸術家連盟の分裂や合同などがそれからの二年間あわただしく行われていった。

平林は、文学団体についても思想的結合団体ではなく広範な知識

人と多くの文学愛好者を結集した緩やかな大衆組織を思い描いていたようだ。「要するに、私はプロレタリア文芸家連盟は、職業的文学者の組合といふ限界を突破して大衆的性質を帯びたものとなった以上は、二三のソシアリストにはたらきかけるものではなくて、あらゆる知識分子にははたらきかけることを主眼としなければならぬ必要がある、さうするためには、昂奮や激語はさけて、組織と規律とに重きをおかなければならず、さういふじみな仕事は文学的傾向の人には余程骨が折れるだろうと思つたのである」(プロレタリア文芸家連盟に就て) という言葉がそれをあらわしている。ただし、個人的自由を優先する傾向にある文学者は所詮組織行動には向いていないという、どうしようもない絶望感も平林の心をかなり占めており、彼は徐々に自分の座席をプロレタリア文学の「観戦団」(「文芸時評」―『新潮』一九二八年二月)の席へ移していく。

4

一九二六年十一月、プロ連は第二回大会を開き、名称をプロレタリア芸術連盟と改め、文学・演劇・美術・音楽の四専門部をおいた。そのとき役員から、秋田雨雀、小川未明、加藤一夫らアナキストとみられる人々が除外された。反対に連盟主流には、先ほどのマルクス主義芸術研究会のメンバーが入り、プロ芸はコミューニズムの芸術団体として再出発するが、やはり『文芸戦線』も同様の勢力関係となり、翌月、中西伊之助、村松正俊、松本弘二が同誌同人を脱退し、新たに千田是也、黒島伝治、小堀甚二ら五人が同人となった。この年は、日本のプロレタリア文学のひとつの転換期になった年で(山

田清三郎などは同誌一二月号で「第二の発展期を迎ふるに至つた」などと言っているが)、日本労働党が結成され、日本共産党も再建される中で、青野季吉がかの「自然生長と目的意識」(同誌九月)を発表し、前年の一〇月「『方向転換』はいかなる諸過程をとるか」を発表して旋風をおこした福本和夫の理論、すなわち政治的結集の前にはまず無産階級内部の非マルクス主義的要素との徹底的な理論闘争の必要を説いた福本イズムが、主にマル芸に集まる若い文学者たちに浸透してきた時期であった。

そのような状況にあって以後プロレタリア文学運動が、まずアナキストをその傍流に閉じ込め、マルクス主義文芸理論をめぐる思想・理論闘争の時代に入ってしまったのは必然と言えるし、それから一九二八年三月の日本左翼文芸家総連合結成までの約二年間は、各派の熾烈な分裂、結合の時期といえる。

平林のこの頃の論文に、「文学の本質について」(『新潮』一九二七年三、五月)という土田杏村との文芸社会学をめぐる論争の発端となった論文がある。彼は震災後自由主義の見直しの仕事に関連して、日本近代文学の歴史をもマルクス主義的唯物史観にもとづいて究明しようとしていたが、同時に文学理論についても「真の科学的基礎に立」って構築できるとして疑わなかった。平林のいわゆる芸術社会学に関するの仕事は稿を改めて明らかにしたいが、ここでは「私は、文学の目的及び機能は、社会が進化し、従つて文学そのものが進化するにつれてかはつてゆくと思ふ」という基本的立場から論じた『文芸戦線』の社説、テーゼに対する彼の言説を見てみる。ただ、注意すべきことは、平林は、文学の本質、目的などは科学的に解明できると思っていたが、文学はすなわち科学そして政治その

ものではないと繰り返して述べていることである。

この論文の「文学の社会的機能」という章で平林は、『文芸戦線』二七年三月号に掲げられた社説の「芸術の社会的機能」の項「一、芸術とは意識を形式の中に体系づけることである。」「二、それ故芸術はこの形式の中に体系づけられた意識を社会に伝播し、社会の成員の意識を組織化する」というテーゼをとり上げ、批判している。すなわちこのテーゼの問題点は意識を「体系づける」と「組織化する」にあると平林は言い、テーゼの筆者が学んだであろうルウ・メルテン及びチエルヌイシェフスキーを誤読しているという。まず「体系づける」のは理論あるいは科学の役割であって、文学のそれではなく、「組織する」のも科学や政治の仕事であり、文学は「科学以前の、すなわち体系化されない意識を読者大衆の間に伝播し普及し暗示してゆく機能をもつてゐる」だけだと説明する。つまり文学が大衆の意識を「体系化」したり「組織したり」するのは思ひ上がりだというわけである。そしてこのようなプロレタリア文学運動家の意識こそが「社会科学と文学とを混淆せしめ」る誤謬に陥れ、「最近における、プロレタリア文学の所謂マルクス主義的目的意識文学への転換の契機となつてゐる」一因だと、平林は本質をついた指摘をしている。暗に文学は理論でも科学でもないのだから、目的意識という理論に先導されるより「自然生長」に任せるのがよいという考え方にもとれよう。

しかし、この急進化したプロレタリア文学運動の弱点を早くもついた平林ではあったが、このあと、「文学と政治（目的意識文学について）」の章では、すんなり歴史的必然としてこれら「社会主義文学」の意義を認めている。ここでも『文芸戦線』同年二月号のテ

ゼに噛みついていのだが、「『社会主義文学は何よりも先づ芸術でなければならぬ！』といふ提言は、社会主義文学の自己否定である。社会主義文学は、さういふ代わりに『社会主義文学は何よりも先づ社会主義的でなければならぬ！』と修正すべきである。」なぜなら「政治闘争の必要」がそうさせるからだ、テーゼ以上の政治主義的規定をしている。これはむしろ彼の唯物史観からくる認識によるが、テーゼの「『社会主義的芸術観は現在に於ける最も完全な芸術観である』といふのは独断以外の何物でもない」と述べているように、社会主義文学は歴史の要請による本来の文学と異なる一過性的な文学であり、変革期にのみ意義ある文学だとはっきり平林は割り切っていた。いや割り切ろうとしていた。この所謂苦しまぎれのアジ・プロ的な「目的意識文学」肯定の問題が、二年後にかの「政治的価値と芸術的価値」（『新潮』二九年三月）に見られる懐疑的二元論に発展し、大きな論争を巻き起こすのである。

5

このようにプロレタリア文学の存在を認めながら、プロレタリア文学運動への疑義を随所に提出して運動とは隔絶する一方の平林が、『文芸戦線』から脱退する日がやがてやって来る。きっかけは、激しい批判、糾弾を受けたからではなく、直接には、プロ芸の分裂、労農派と見られる『文芸戦線』一派のプロ芸からの除名事件に端を発する。一九二七年六月である。

平林は、「無産文芸三派の批判」（『読売新聞』同年七月二二、二三、二四日）で書いている。先に『文芸戦線』を脱退したアナキス

トを中心に結成された日本無産派文芸連盟の宣言には「矛盾と撞着」しか見られず、曖昧な組織性で「党派的文芸の攻撃」を掲げている。当時の団体が党派的に過ぎで、この連盟の存続を危ぶんでいる。問題はプロ芸の分裂、つまりそこから出た労農芸術家連盟とプロ芸の対立だが、平林は両派の宣言や綱領に大きな相違を見ず、両者の主張を読んでもお互いに「公式主義」「ブルジョア的」と同じような言葉で応酬しており、「この二つの言葉の応酬のうちに両派の『対立の根拠』をさがしもとめることは、私たちにはなかなか骨の折れることである」と正直な感想を漏らし、「分裂の理由が甚だ薄弱で、原理的には対立の根拠がない」と結論づける。それでもその根拠を求めると、労農派（『文芸戦線』派）は「職業組合的色彩を多分にもちながら、一般的政治闘争の舞台にまで触手をのばさうとする」が、プロ芸派はその「理論の二重性、不徹底さを難詰」しながら、労農派のように政治闘争の中で「作品行動」（『文芸戦線』派がいう創作活動のこと）を優先しようとはしない、どこにプロ芸の芸術団体としての特殊性を見いだすのかと平林は問う。この見方による両派の差、区別の仕方はおそらく当たっている。

この分裂はたしかに不透明で、何が真因かは今もってわかりにくいというべきだが、マル芸出身の若き福本イストたちと、『種時く人』以来の古参の運動家との世代的なギャップや、あるいは福本イズムをめぐる対立とも考えられるが、「いかに文学運動を政治闘争の『一翼』たらしめるかという問題」「もう少し率直に言えば、当時ようやく大衆の前にその姿をあらわしてきた日本共産党を支持するかしないか、支持するにしてもその具体的方途を芸術戦線はいかにえらぶべきか、という『政治と文学』の相関をめぐる対立抗争に

ほかならなかつた」と述べる平野謙の見方（『初期『文芸戦線』の時代』）がもっとも妥当ではないか。

平林はこの「無産文芸三派の批判」のおわりでプロ芸、労芸から「一時脱退」を表明した。その理由は、後日、青野季吉との論争の中で明らかにされたとおりで、ひとつにはプロレタリア文学運動内の分裂事件について、「その指導原理の対立を十分に認識し得なかつた」点、二つ目には一九二六年末に雑誌『太陽』の主筆（編集主幹）になり中立の立場に立つため、三つ目は先に述べた震災前の運動の二の舞いを演じる『文芸戦線』は創刊当初から解散すべきだと内心思っていたことなどをあげ、これまで何もしなかつたことを自己批判している。（『党人と自由人と』―『不同調』一九二八年八月）

これらの理由のどれもがその通りだろうと思うが、この時点で一応平林は戦線から離脱する。しかし、彼はあるべきプロレタリア文学の姿を求めて、依然として熱心な「観戦団の一員」として盛んに発言はつづけたし、蔵原惟人が中心になって一九二八年一〇月設立された国際文化研究所、それを改組したプロレタリア文化研究所の所員になっている事実（すでに祖父江昭二が『二十世紀文学の黎明期』―一九九三年二月新日本出版社刊―で指摘している）があり、完全に運動から離れたともいえない。

一九二七年七月『文芸戦線』からの脱退を声明した平林に対しては、同誌九月号で前田河広一郎が「平林初之輔を送る」を書いてい

かつての同志、平林初之輔は去つた。長い間の沈黙と絶縁から、

最近、彼は『よみうり』紙上で、我々の運動と完全に無関係なることを声明した。彼の犀利な批判性と、冷静な該博な知能とを、いかに我々は『種時く人』時代から我々の間に尊重したことか！

彼を我々から引き離したものは何か？今それを云ふまい。平林よ、行け。君の『文芸』に関する批判も読んでゐる。かへつて、なまじひに随伴者となつて、心ならずも運動に投じたり、方向を共にしたりするよりも、君の今度の絶縁書も、我々はむしろ壮とする。過去において功労多かつた人だ、去るに臨んで、一応手を握らう！

（「自他、或ひは一般」）

なんとも心暖まる決別の書ではないか。一応平林の所論を読んだうえで、平林の考えるところ、心情も察しての文章といえよう。これに対して、前田河よりも長く「同志」の関係にあった青野はその後の労芸の再分裂、すなわち直接には山川均の論文掲載をめぐる問題に端を發した蔵原、山田らと青野、前田河らの対立とそれによる蔵原たちの脱退（先に平野謙の指摘のようなことの再現と考えられる）そして、前衛芸術家同盟の設立（同年一月）などをめぐる問題で平林と激しく論争する。ことの発端は、労芸の再分裂後、『文芸戦線』二八年一月号に青野が書いた「芸術運動に現はわれた宗派的分裂主義の諸相」という前芸批判の論文に、平林がこの分裂をやむを得ないものとして、青野は公式主義だという旨の批判を「文芸時評」（同年二月、前出）で展開したことによる。それに対して青野も「政治的見解その他一二」（『文芸戦線』同年四月）中の「平林初之輔君に数言」で前芸派「逃亡」の不当性をくり返すのみであったが、特に青野は「運動の圏外」から発言している平林は事実誤識

をしているとしたうえで、「長い間の同志平林君、及び親しい友人としての平林君に、衷心から求めないでは止まないものがある」、かつての「戦闘的マルクス主義者」平林がどうしてこうなったのか、「その大きな変化の説明を聞き度い」とまで望むのである。その答えが、前述した「党人と自由人と」にあたるわけだが、『文芸戦線』が労芸の機関誌になったとはいえ、同人制時代の職業団体的組織観を脱せず、支持する政党や団体を狭いものにしていく、非大衆志向を平林が批判していることに青野は気づいていない。

平林自身にもむろん文学運動の明確なヴィジョンがあるわけではなかったが、とにかく大衆的基盤というものを大切に考えていたようだ。その点が、この論争あたりから、彼をどちらかという蔵原たちの前芸寄り、さらにナップ（全日本無産者芸術団体協議会）寄りにしていく要因かもしれない。国際文化研究所入りもこんなところから来ていると考えられる。

とにかく『文芸戦線』脱退とこの論争によって、青野季吉との決裂は決定的になった。のちに所謂芸術的価値論争でもう一度論争するが、冒頭に述べたようにすでに二人は異なる道を歩んでいたのだ。

（おおわだ しげる・一九八四年大学院博士課程修了）